

研究者の横顔			
フリガナ	タケウチ ヤスト		
お名前	竹内 康人	助成金額	100 万円
ご所属	金沢大学がん進展制御研究所		
研究テーマ	骨髄に形成される転移前ハブの新規概念に基づく乳がん転移機構の解明		
1：研究者になろうとしたきっかけ			
<p>研究者になろうとしたきっかけは、臨床に従事していた時に、頭頸部癌の患者さんを担当しており、再発する患者さんと再発しない患者さんの違いは何だろう？という疑問を抱いたことです。</p>			
2：助成研究の内容紹介			
<p>乳がんは、女性に最も多く発症するがんであり、約10人に1人の割合で再発が生じます。再発乳がんの約70%は遠隔転移を伴います。しかし、転移乳がんに対する有効な治療法は存在しません。転移乳がんに対する治療法の開発のためには、転移メカニズムの解明が必要です。乳がんは、骨組織への高い指向性があり、骨（65%）・肺（20%）・肝（10%）・脳（5%）と偏って転移します。さらに、乳がんの休眠期間（原発がん治療から再発までの潜伏期間）は、5年から30年と非常に幅が広く、再発タイミングの予測が困難です。本研究では、骨組織に到達した乳がん細胞に着目し、骨転移の初期において、骨髄細胞とがん細胞がどのような相互作用をしているのかを明らかにします。</p>			
3：2の将来に繋がる結果予想・目標			
<p>骨転移の初期において、乳がん細胞と骨髄マクロファージが相互作用していることが見えてきました。さらに、破骨細胞（骨）・肺泡マクロファージ（肺）・クッパー細胞（肝）・ミクログリア（脳）などの臓器特異的な組織常在マクロファージに類似したマクロファージ集団も出現することが分かりました。これらのマクロファージを詳細に調べることによって、骨髄とその他の転移先臓器におけるマクロファージを介した新たな転移モデルを提唱し、治療標的を開拓することを目指します。</p>			
4：全国の RFL 関係者に一言メッセージ			
<p>転移がんの発見は、医者にとってお手上げであり、余命宣告であるという現状です。しかし、転移がんの生じるメカニズムを解明することによって、転移再発を予測することや、転移がんに対する治療法の確立につながると信じて、研究を日々行なっています。転移がんによって死ぬことのない未来となるように、研究成果を臨床現場へと応用したいと思っています。</p>			